



筑紫女学園大学リポジット

The Role of Shin-Buddhism in the Formation of Local Culture in Northern Kyushu during the Edo Period: Focusing on Calligraphies and Paintings

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 知美, KOBAYASHI, Tomomi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1047

北部九州の近世文化形成における真宗寺院の役割

〔福岡藩真宗寺院所蔵の書画から〕

小林 知美

一、はじめに

日本絵画史の上から見た江戸時代の後期は、社会の各層において、しかも全国的な規模で、絵画の理解者や需要者が急増したことで特徴づけられる。⁽¹⁾ 江戸時代の地方における絵画のあり方を考える上で、庶民層を中心的な対象として活動していた真宗寺院に伝わる書画は有効な検討材料となる。本稿では、北部九州のうち福岡藩の真宗寺院の所蔵する書画に焦点をあて、当地における近世の地方文化形成の様相と内実を明らかにすることを目的とする。

二、福岡藩真宗寺院所蔵文化財の調査とその概要

(1) 福岡藩の真宗寺院

福岡藩は筑前国ほぼ一国を領有した大藩であった。⁽²⁾ 『福岡県寺院沿革史』(昭和五年)によれば、福岡県下の真宗系寺院は、寺院数全体の三割以上を占めるが、これは江戸時代の福岡藩の宗門改めの記録に

おける割合とほぼ一致する。このことは、江戸時代の真宗の宗派としての勢力が現在に至るまである程度は継続していることを示している。また実地調査にもとづく印象ではあるが、真宗では世襲が基本であるため、各寺院所蔵文化財の伝存率が極めて高いようである。したがって真宗寺院所蔵文化財の悉皆的調査は、近世から近代にかけての地方文化に関するトレンチ発掘の役割を果たすといえる。

平成一八(二〇〇六)年度に着手された筑紫女学園大学による北部九州真宗文化財調査は、現在に至るまで継続され、その成果が調査報告書の形で刊行され、検討の対象となる素材が充実してきた。⁽³⁾ 前稿で真宗寺院所蔵文化財を元に地方美術史を再構築することができているのではないかという提言をしたが、⁽⁴⁾ 本稿ではその提言の実践を試みたい。

(2) 調査対象寺院

本稿で分析の対象としたのは【表1】にまとめた福岡県下の真宗寺院二三ヶ所に所蔵される文化財である。⁽⁵⁾ 福岡藩の領内は支配の上から郡・浦・町に三分されていた。調査対象寺院の内訳は、町方寺院は福

【表1】福岡藩真宗寺院所蔵文化財調査先寺院リスト

No.	寺院名（所在地）	町名・地名（当時）	開基・建立年代（注5掲載論文表番号）	報告書名
1	光専寺（福岡市）	福岡薬院町	淨徳・慶長15（1610）年造立（No. 2）	福岡市報告書
2	浄満寺（福岡市）	福岡西町	淨心・天正元（1573）年（No. 11）	未刊
3	萬行寺（福岡市）	博多祇園町	空性・天文10（1541）年（No. 18）	福岡市報告書
4	妙徳寺（福岡市）	那珂郡春吉寺町村	愚善・寛永12（1635）年木仏寺号（No. 97）	報告書V
5	西蓮寺（筑紫野市）	御笠郡萩原村	宗念・寛永9（1632）年木仏寺号（No. 144）	報告書I
6	信覚寺（朝倉市）	夜須郡野町村	休意・寛永年中（1624 - 43）開基。寛永20（1643）年木仏寺号。（No. 162）	報告書I
7	万徳寺（朝倉市）	上座郡須川村	空心・慶長10（1605）年木仏寺号。（No. 167）	報告書I
8	巖浄寺（朝倉市）	上座郡菱野村	正善・明暦3（1657）年木仏寺号。（No. 171）	報告書I
9	品照寺（朝倉市）	下座郡三奈木村	理善・天文頃（1532 - 54）建立（No. 180）	品照寺報告書
10	浄円寺（嘉麻市）	嘉麻郡植木村	佑慶・明応6（1497）年。天正15（1587）年木仏寺号。（No. 183）	報告書II
11	長源寺（嘉麻市）	嘉麻郡白井村	明順。寛永18（1641）年木仏寺号。（No. 184）	報告書II
12	善照寺（嘉麻市）	嘉麻郡下西郷村	善照・大永頃（1521 - 27）。享保2（1717）年木仏寺号。（No. 185）	報告書II
13	長教寺（嘉麻市）	嘉麻郡隈畑村	明善。寛永7（1630）年木仏寺号。（No. 186）	報告書III
14	仙林寺（嘉麻市）	嘉麻郡本谷村	雄念。明和4（1767）年木仏寺号。（No. 196）	報告書III
15	明正寺（飯塚市）	穂波郡飯塚村	了鎮・長享元（1487）年木仏。天正15（1587）年寺号。慶長9（1604）年西へ改派。（No. 205）	報告書II
16	西光寺（飯塚市）	穂波郡馬敷村	西蓮・文禄年中（1592 - 95）。正徳元（1711）年木仏。慶長元（1596）年寺号。（No. 208）	報告書III
17	明円寺（飯塚市）	穂波郡大分村	明円・明和元（1764）年木仏。文禄2（1593）年寺号。（No. 209）	報告書II
18	安楽寺（飯塚市）	穂波郡壱岐須村	教了・元和2（1616）年木仏寺号。（No. 211）	報告書II
19	長明寺（桂川町）	穂波郡土師村	佑西・寛正5（1464）年。正徳4（1714）年木仏寺号。（No. 216）	報告書III
20	浄福寺（直方市）	鞍手郡感田村	乗雲。慶長14（1609）年木仏寺号（No. 217）	報告書IV
21	浄蓮寺（宗像市）	宗像郡藤原村	祐尊。元亀元（1570）年開基・木仏寺号。（No. 283）。	報告書I
22	正蓮寺（津福市）	宗像郡下西郷村	順正。慶長19（1614）年木仏寺号。（No. 284）	報告書I
23	浄万寺（宗像市）	宗像郡赤間村	當円。元文5年（1740）木仏、寛永21（1644）年寺号。（No. 296）	未刊

岡藩の触頭の触頭の光専寺(表1-1-1)と萬行寺(表1-1-2)、そして浄満寺(表1-1-3)の三ヶ寺、郡方寺院は三ヶ寺以外の二〇ヶ寺、浦方寺院は皆無である。調査した郡方寺院は嘉穂地方(嘉麻郡・穂波郡)を中心としている。嘉穂地方は藩下で真宗伝播が比較的古い東四郡(遠賀、鞍手、嘉麻、穂波)に含まれる純農村地帯で、三方を山に囲まれた盆地を遠賀川と長崎街道が縦走する交通の要衝である。

(3) 作品概要

福岡藩の真宗寺院所蔵文化財のうちの書画類を、性格の上から、第一に真宗独自の作品、第二に通仏教的作品、第三に非宗教的作品の三群に分類すると、数の上では、第一の真宗独自の作品は全体の一割程度、第二の通仏教的作品は一割未満で、第三の非宗教的作品がのこり八割程度を占める。真宗独自の作品とは、末寺の申請により本山から下賜される本尊や祖師像や親鸞聖人絵伝などの免物であるが、免物と一般的な通仏教的作品の合計の約四倍の非宗教的(世俗的)作品が真宗寺院に所蔵されているのであり、真宗寺院は世俗的書画類の宝庫である。

三、福岡藩真宗寺院所蔵書画の作者

真宗寺院所蔵の書画類のうちには落款印章などから作者の判明する作品が多く含まれる。その作者の傾向を把握するため、近世から近代にかけてまとめられた三種の書画作者の伝記類で検索した。編集方針

を異にする複数の伝記類を用いて多角的に検討することで、福岡藩真宗寺院所蔵書画作者の傾向を具体的に把握することができると考える。まず、幕府御抱え絵師であった狩野派の絵師・朝岡興禎(一八〇〇-一五六)による『古画備考』⁶⁾、次に福岡藩の地方文人の索引とみなせる『筑前名家人物志』⁷⁾、最後に真宗僧の書画作者について『真宗本派学僧逸伝』⁸⁾を用い、福岡藩真宗寺院所蔵作品の作者の傾向についてみってみる。

(1) 『古画備考』所載の書画作者

『古画備考』は、江戸幕府御用絵師、木挽町狩野家の狩野清川院養信の弟で朝岡家の養子・興禎による上代から同時代までの書画関係情報⁹⁾の集成で、全四八巻のうち第四五巻までは作者の分類ごとの目録となっており、江戸時代の狩野派の立場からの書画観が示されている。作者の分類は帝室、廷臣、柳営・武家、釈門、詩歌・連俳・茶香・雑、上古以来近世に至るまでの名画の作者、各流派(浮世絵、巨勢家、土佐家、住吉家、光悦流、狩野派、英流、宮殿筆者)である。【表2】に福岡藩真宗寺院における『古画備考』所載作者による作品の所蔵状況¹⁰⁾をまとめた。

福岡藩真宗寺院に所蔵される作品の作者で、『古画備考』採録される画家は一八名である。彼らを作者の分類ごとにとまとめると以下①～④のようになる。

①柳営・武家

武家に分類される作者で福岡藩真宗寺院に作品が所蔵されているの

【表2】福岡藩真宗寺院所蔵の『古画備考』所載作者による作品一覧

No.	作者名	分類	作品（報告書作品番号）	所蔵先
1	筑前侍従綱政朝臣	巻第5 柳営・武家2	花鶏図・竹鶏図（福絵23・1・2）	萬行寺
2	梵仙竺仙禪師	巻第8 釈門2	墨跡（写カ）（V美工194）	妙徳寺
3	顕如上人	巻第10 釈門4	顕如書状（福古文書1）	萬行寺
参1	本如上人	なし	墨蘭図（Ⅲ220）、富士図（Ⅲ221）	西光寺
4	大含	巻第11 釈門5	二行書（福書40）	萬行寺
5	鉄翁	巻第11 釈門5	墨画貼交図（蟹図・山水図）（絵11）【図1】	萬行寺
6	頼山陽	巻第12 詩歌・連俳・茶香・雑	墨書「一瓢領」（V142）	妙徳寺
7	馬渡高雲	巻第26 名画14	達磨図（品書画71）	品照寺
8	高田敬圃	巻第26 名画14	無量寿経曼荼羅図（版本）（福絵56）	萬行寺
9	月溪呉春	巻第29 近世1	蝶に菜花図（福絵30）	萬行寺
10	松村景文	巻第29 近世1	和歌墨書及び蘆月図（IV48）	浄福寺
11	少琴女	巻第30 近世2	墨竹図扇面（IV74）	浄福寺
			亀図（V109）	妙徳寺
			墨梅図2幅、墨竹図、墨蘭図扇面、書画貼交屏風（未刊）	浄満寺
12	長谷川雪堤	巻第30 近世2	玉川絵図（版本）（品書画231）	品照寺
13	仙厓和尚	巻第30 近世2	貼交屏風（II100）	浄圓寺
			山号額「雲霖山」（II106）	浄圓寺
			寒山拾得図（III218）	西光寺
			寺号額「長教精舎」（III290）	長教寺
			墨跡「思齋」、送別図、一行書「仏会是」、牛図（品書画21、201、202、203）	品照寺
			如意輪観音図（IV30）	浄福寺
			尾上心七早替図（V59）、鍾馗図（V60）、墨菊図（V61）	妙徳寺
書画貼交屏風（未刊）	浄満寺			
14	狩野永真安信	巻第36 狩野譜中橋1	雲龍図（福絵17）	萬行寺
15	狩野探幽斎守信	巻第37 狩野譜鍛冶橋2	山水図（福絵21）	萬行寺
16	狩野栄信	巻第38 狩野譜木挽町3	昇り鯉・降り鯉図（福絵36・1・2）	萬行寺
17	狩野重信	巻第40 狩野門人譜1	梅に鳩図・東坡風水洞図屏風（福絵43）【図2】	萬行寺
18	狩野洞琳由信	巻第40 狩野門人譜1	雲龍図（福絵18）	萬行寺
参2	尾形守俊	巻第42 狩野門人譜3に3代友元守房	十二支図絵巻（未刊）	浄満寺
19	上田代六主親（主治）	巻第42 狩野門人譜3	猫鼠之図（福絵40）【図3】	萬行寺
参3	上田永調		正演上人像（福絵32）【図4】	萬行寺
参4	衣笠守是	巻第42 狩野門人譜3に衣笠初代半助守重	松鶴図襖（未刊）【図5】	浄満寺

は第三代藩主綱政が唯一である。綱政は狩野永真安信に絵を学び、自筆の絵を含む多くの作品を国内の神社に寄進するなどした絵画を愛好した藩主であるが、「花鶏図・竹鶏図」(表2-1-1)は絹本着色の本格的な花鳥図である。¹⁰⁾

② 積門

積門に分類される作者は四人。梵仙竺仙(表2-1-2)、本願寺門主・頭如上人(表2-1-3)、豊後国の東本願寺派満徳寺の僧侶・大舎(表2-1-4)、長崎の春徳寺の僧侶・鉄翁(表2-1-5)である。そのうち大舎は雲華と号し、頼山陽や田能村竹田と交友があった人物¹¹⁾、鉄翁は門人・煌園の筆録による『鉄翁画談』からその絵画観を知ることのできる人物である¹²⁾。鉄翁の作品「墨画貼交図(蟹図・山水図)」【図1】¹³⁾の繊細な山岳描写は、『古画備考』の「秀逸膏潤」という評価に相応しい。

③ 詩歌、名画、近世

頼山陽(表2-1-6)、高田敬圃(表2-1-8)、月溪呉春(表2-1-9)、松村景文(表2-1-10)など関西の画家の作品が各一点確認される。筑前の画家である少琴女(表2-1-11)、仙厓(表2-1-13)の作品が、それぞれ七点(三ヶ寺)、一三点(七ヶ寺)に確認され、幅広く精力的な活動がうかがえる。

④ 狩野派とその門人

狩野派奥絵師の三人・永真安信(表2-1-14)、探幽(表2-1-15)、栄信(表2-1-16)と、狩野派門人の絵師三人・重信(表2-1-17)、洞琳由信(表2-1-18)、上田主親(表2-1-19)の落款を持つ作品が確認さ

れる。とくに重信の「梅に鳩・東坡風水洞河屏風」(福岡市指定文化財)(表2-1-17)【図2】¹⁴⁾は新出の代表的作品として着目される。

狩野派の流れをくむ福岡藩の御抱え絵師・上田家の作品として、上田主親(主治)筆「猫鼠之図」(表2-1-19)【図3】¹⁵⁾、「古画備考」には載らないが、主親の子。永調筆「正演上人像」(表2-1-3)【図4】¹⁶⁾がある。前者は萬行寺で実際にあった猫と鼠の事件を描く絵巻、後者は萬行寺第一五代住職の肖像である。また同じく藩の御抱え絵師の衣笠家『古画備考』には初代守重が採録の第七代守是による浄満寺襖絵「松鶴図」(表2-1-3)【図5】¹⁷⁾がある。藩の御抱え絵師が、真宗寺院の注文を受けて制作していたことが知られる。

以上のように、狩野派奥絵師や門人をはじめ、狩野派の流れをくむ藩の御抱え絵師の作品が複数伝わり、それらが触頭寺院に集中していることから、幕府の庇護のもと全国に広がっていた狩野派が福岡藩にも組織的に展開し、触頭寺院を中心に作品の受容がなされていたこと、またそのような寺院が御抱え絵師に制作を依頼することもあったことが確認できる。

(2) 『筑前名家人物志』所載の書画作者

『筑前名家人物志』は、森三狂堂政太郎が、明治四一(一九〇八)年に、「我北筑における碩学鴻儒、及び詩文・書画・詠歌を以て其名を知らるる者、元禄より慶応年間に至る大家の姓名・通称・号等を詳記し、同好の士参考の一助にせん」とまとめた伝記集であり、黒田二十五騎、孝子貞婦順民九名、儒家七一名、書家二一名、画家一〇六

名、国学者并歌人一七八名、俳諧并狂歌師七名、釈士一二人、雑部二八名、筑前勤王志士四六名の伝記が列挙される。【表3】に福岡藩真宗寺院における『筑前名家人物志』所載作者による作品の所蔵状況をまとめた。

福岡藩真宗寺院に所蔵される作品における『筑前名家人物志』所載作者は二三名（その内『古画備考』掲載者は○印をつけた四名）である。そのうち八名が儒者で最多、七名が画家、二名が書家、一名が国学者、三名が釈門である。以下分類ごとに概観しよう。

① 儒者

儒者では、貝原益軒の妻東軒（表3-1）、益軒の弟子末永虚舟（表3-2）の以外は、福岡藩西学問所・甘棠館の祭酒であった亀井南冥（表3-3）の流れをくむ儒者の作品がままとまっている。南冥の息子・昭陽（表3-4）、その娘・少琴（表3-5）と夫・雷首（表3-6）、南冥の弟子・原古処（表3-7）と山口白賁（表3-8）、『筑前名家人物志』所載外では南冥・昭陽に学び日田咸宜園を開いた広瀬淡窓の弟・広瀬旭莊（表3-3）、山崎普山（表3-2）、佐賀藩の草場佩川（表3-1）、江戸の太田南畝（表3-4）の作品が見られる。

亀井南冥は、筆才を交流した朝鮮通信使からも賞賛され、草書の作品が多く伝わるが、浄満寺住職の肖像画への着賛は端正な楷書による（表3-3）【図5】¹⁹。『筑前名家人物志』では、昭陽は「古文辞ヲ善クス」、少琴は「詩文書画二巧ミ」、雷首は「詩文書ヲ能ス」、南冥高足門弟詩文書ヲ能クス」と評され、一族共に詩書画を能くした。門人・山口白賁が描いた「亀井一家集合図」（表3-8）【図6】²⁰は、南冥ら

しき老人を中心に酒を酌み交わす一族の様子を賛と共に淡墨で描くユーモアにとんだ作品である。

② 書家、画家、国学者并歌人

書家では二川相近（表3-9）と上村米山（表3-10）、国学者并歌人として二川相近に師事した大隈言道（表3-20）の作品がある。画家の筆頭に藩主黒田綱政（表3-13）、続いて藩御抱え絵師の尾形家守俊（表3-14）、衣笠守是（表3-15）、上田主親（表3-16）が挙げられる。他に博多の村田東圃（表3-17）、斎藤秋圃（表3-18）、太宰府の吉嗣拝山（表3-19）、萱嶋秀山の子秀峰（表3-16）の作品が確認できる。作品はないが、文人画論『鉄翁画談』の著者・耕園（煌園）の名がみえる。『筑前名家人物志』では、狩野派門弟の流れをくむ福岡藩の御抱え絵師、博多や太宰府の絵師など画家名が、具体的な住処とともに挙げられている。

③ 釈門

釈門では禅宗の仙厓、真言宗の曇栄、真宗の宝雲の三人が挙げられる。『筑前名家人物志』所載の儒者が八人を数えたのに対し半数に満たない。仙厓には、浄圓寺・長教寺・品照寺の額字（表2-13）、曇栄には妙徳寺の山号額の下書き（表3-22）があり、真宗寺院が祐筆の禅僧に揮毫を依頼していたことが知られる。とくに浄圓寺は、仙厓と宝雲だけでなく以下で検討を加える真宗の学僧・僧僕や南溪らによる貼交屏風（表3-23）を所蔵する他、本堂天井画が斎藤秋圃作（伝）（表3-18）、杉戸絵は小倉の絵師石南園の作で、儒・仏・画家取り交ぜた地方文人の書画活動の場であったと考えられる。

【表3】福岡藩真宗寺院所蔵の『筑前名家人物志』所載作者による作品一覧

No.	作者名	分類	作品	所蔵先
1	貝原東軒	儒6	書「復禮」(V135)	妙徳寺
2	末永虚舟	儒15	七言絶句(品200)	品照寺
3	亀井南冥	儒41	二行書(IV70)	浄福寺
			寺号額「浄満寺」、レイ順像(着賛)(未刊)【図6】	浄満寺
			寺号額墨書「光善精舎」(未刊)	光善寺
4	亀井昭陽	儒42	二行書「漱風着松」(V136)	妙徳寺
5	亀井少琴○	儒46	※【表2-11】参照	
6	亀井雷首	儒47	四行書「是色芙蓉」(V140)	妙徳寺
			書画貼交屏風(未刊)	浄満寺
7	原古処	儒48	墨跡貼交(品18)	品照寺
8	山口白賁	儒52	亀井一家集合図(未刊)【図7】	浄満寺
参1	草場佩川	-	墨竹図(福絵26)	萬行寺
参2	山崎普山	-	西光寺開基由来書(Ⅲ243)	西光寺
参3	広瀬旭莊	-	二行書(IV32)	浄福寺
参4	太田南畝	-	二行書(IV33)	浄福寺
9	二川相近	書9	三行書(IV書画38・49)	浄福寺
10	上村米山	書13	二行書(V184)	妙徳寺
13	黒田綱政○	画1	花鶏図・竹鶏図(福絵23)	萬行寺
14	尾形守俊	画7	十二支図絵巻(未刊)	浄満寺
15	衣笠守是	画30	松鶴図襖(未刊)【図5】	浄満寺
16	上田主親○	画58	猫鼠之図(福絵40)【図3】	萬行寺
17	村田東圃	画63	蓮華図並びに賛(福絵27)	萬行寺
18	斎藤秋圃	画67	天上画(伝)(Ⅱ101)	浄圓寺
			竹に亀図、松に鶴図(品204・205)	品照寺
参5	耕園(煌園)	画85	『鉄翁画談』(1883年)	-
19	吉嗣拜山	画87	墨画(鼓山と共作)(Ⅲ219)	西光寺
			山水図(品24)	品照寺
			墨書「階前千里」(V138)	妙徳寺
参6	萱嶋秀峰	画102に萱嶋秀山	老松図襖(福絵89)	萬行寺
			孔雀図襖(Ⅲ271)	長明寺
20	大隈言道	国歌15	桐の葉拓本並びに和歌墨書(IV54)	浄福寺
21	仙厓○	釈6	【表2-13】参照	
22	曇栄	釈7	山号書「隆光山」(V146)	妙徳寺
23	宝雲	釈12	墨跡13幅(Ⅱ71~83、	長源寺
			三行書「前水後山」(Ⅲ238)	西光寺
			貼交屏風(Ⅱ100)	浄圓寺
			五行書(IV23)	浄福寺
			墨跡3幅(福書16・21・79)	萬行寺

※『古画備考』の所載作者に○をつけた

(3) 『真宗本派学僧逸伝』所載の書画作者

『真宗本派学僧逸伝』は、寛永一五（一六三〇）年の本願寺の学林創建期以降の学僧の列伝である。本書所載の書画作者のうち、福岡藩真宗寺院に作品が所蔵される人物のほか、参考となる人物を含め、①学僧と②画僧に分けて【表4】にまとめた。

①学僧

本願寺の勸学（真宗の学階の最高位）を務めた学僧（表4-1、2、3、4、7、8、9）が書跡を多く残している。中でも萬行寺の曇龍（表4-7）と長源寺住職の宝雲（表4-9）に関係する作品が多い。

②画僧

福岡藩真宗寺院所蔵作品には含まれていないが、参考のため『真宗本派画僧逸伝』やそのほかの資料から画僧または絵画に携わったと認められる僧侶をまとめておく。まず『真宗本派画僧逸伝』で「画僧」と評されている真宗僧・雲室（二七五二―一八二七）（表4-1参1）がいる。雲室は、信濃光蓮寺に生まれたが、絵を好み、諸方に遊学の後、江戸光明寺に住した真宗僧である。画を谷文晁に学び、小不朽社という詩画の会を営み、随筆『雲室随筆』²¹を記している（後述）。潮音（表4-1参2）は江戸西教寺の第八代住持で、幅広い学問的交流の内実が西教寺所蔵資料から解明されている。画事としては、江戸時代後期以降に流行した五種生死輪図の版木を製作している。²²

真宗大谷派の画僧として、豊前専念寺の住職平野五岳（表4-1参3）、そして『古画備考』所載の豊後満徳寺の大舎（表4-1参4）がいる。浄福寺・萬行寺・妙徳寺には彼らの作品が所蔵されている。こ

のように真宗寺院の中から画僧や絵をたしなむ僧侶が生まれていたことは着目される。

四、北部九州の地方文化形成における真宗寺院

福岡藩真宗寺院所蔵書画の作者の傾向について諸伝記類を検索し、考察を加えた結果、当地における近世地方文化形成において真宗寺院の果たした役割を次の三点にまとめることができるだろう。

(1) 受容者としての役割

狩野派の奥絵師の作品からその流れをくむ藩の御抱え絵師の作品まで、各分類・各階層の作者の作品群が受容されていることから、真宗寺院は、狩野派を中心とする絵画観を地方に知らしめる場としての機能をもっていたといえるだろう。とくに奥絵師の落款印章を持つ作品や、藩主の作品、狩野派の初期作品である重信の屏風（萬行寺所蔵）【図2】や、無記名ながら九相図絵巻（西光寺所蔵）、仙人図（萬行寺所蔵）【図8】²³などの本格的な画技による着色画の大作が触頭をはじめとする有力寺院に所蔵されており、これらの絵画受容の背景に真宗寺院と藩政との関係がうかがえよう。²⁴ また福岡藩をはじめとする全国の儒者や学僧などによる作品が多く、真宗寺院が彼らの作品の受容や制作の場となっていたことが知られる。

【表4】福岡藩下真宗寺院所蔵の『真宗本派学僧逸伝』所載作者による作品一覧

No.	作者	内容	作品など	所蔵先
1	円月 (1818 - 1902)	勧学・豊前派	四行書IV65	浄福寺
2	慶忍 (1816 - 1883)	勧学・豊前長久寺	二行書、墨書貼交 (IV24、102)	浄福寺
			墨書「白蓮社」ほか4幅 (品18、23、211、251)	品照寺
3	玄雄 (1804 - 1881)	勧学・筑前正蓮寺→ 大阪専念寺	一行書 (V147)	妙徳寺
			書跡3幅 (IV26、58)、1枚 (IV90)	浄福寺
4	善海 (1855 - 1923)	勧学・豊前照雲寺	墨菊図扇面 (V95)、書画帖 (V100・101)	妙徳寺
5	僧樸 (1719 - 1762)	京都宏山寺	貼交屏風 (II100)	浄園寺
6	大同 (1782)	筑前派の祖・真宗律・甘木教法寺	墨跡「随嘉」、「李白詩」、「右寄呈」(品16、222、224)	品照寺
7	曇龍 (1769 - 1841)	勧学・龍華学派の祖・豊前超覚寺→博多萬行寺	墨跡4幅 (福書3、19、22、23)、古梅図 (福絵20)、広如上人筆院号・消息 (福皮5、書31・82) ほか。	萬行寺
			一行書 (品8)、曇龍ショウ (品223)	品照寺
8	宝雲 (1791 - 1847)	勧学・筑前長源寺	【表3 - 23】参照	
9	南溪 (1790 - 1873)	勧学・豊後満福寺	貼交屏風 (II100)	浄園寺
			額字 (II125)	善照寺
			宗祖六百回忌訓導書 (品22)	品照寺
参1	雲室 (1757 - 1827)	画僧・江戸光明寺	※『雲室随筆』	-
参2	潮音 (1783 - 1836)	江戸西教寺	※五種生死輪図の出版	-
参3	平野五岳 (1809 - 1863)	大谷派・豊前専念寺	青桐図並びに賛 (IV57)	浄福寺
			竹菊図、山水図扇面、四行書 (V87、89、139)	妙徳寺
			奇石水仙図 (福絵12)	萬行寺
参4	大含 (1773 - 1850)	大谷派・豊後満徳寺	二行書 (福書40)	萬行寺

(2) 発注者としての役割

尾形守是筆「松鶴図襖」(浄満寺所蔵)【図5】、萱嶋秀峰筆「孔雀図襖」(長明寺所蔵)、「老松図襖」(萬行寺所蔵)など、真宗寺院の荘嚴画制作を藩の御抱え絵師や町絵師が手掛けている。また上田永調筆「正演上人像」(萬行寺所蔵)【図4】、亀井南冥着賛「創順像」(浄満寺所蔵)【図6】、高橋源吉筆「悦雲像」(浄福寺所蔵)など、真宗寺院の住職の肖像画制作に、御抱え絵師から洋画家にいたる絵師や藩儒が関わっている。さらに上田主親筆「猫鼠絵巻」(萬行寺所蔵)【図3】などの鑑賞画の絵巻を発注している。このように真宗寺院は、絵師や文人たちに対する書画の発注者としての役割をしばしば担っていた。

(3) 作者のゆりかごととしての役割

真宗寺院から絵をたしなむ僧侶が生まれてきたことを先に指摘した。ここでは三人の真宗僧侶と門徒を例にとりあげ、その活動や書画観について、著作や作品から検討を加える。

① 雲室(一七五二—一八二七)

(A) 雲室著『雲室随筆』(注21前掲書八五頁)

「予東西南北飄然たる故、人予が居所もさだめず諸名流の間を遊びける故、雲の如く無心なりと笑ける故、自雲室と号し。」

(B) 同(同八六頁)

「鶴鳴市川匡という先生から)何の為に京都へ行く、ぞと訪し故、学問の為なりと答えければ、先生被申は、それは学問に托して遊び歩くといふものなり。今日迄故郷を出て数日の

間遊ばれし咄なるが、其うち学問出来候哉、一も益は有間敷なり。方今天下泰平の世なれば、一生遊びあるきても遊びには事はか、ぬ世の中なり。短き命を持て何の時か此損を取りかへさるゝぞ」

雲室は生まれた信濃光蓮寺から出て「諸名流」を訪ねて「東西南北飄然」しながら学んでいた(A)。ある時、市川匡先生から言われた「一生遊び歩いても有益な学問はできない」の一言を肝に銘じ(B)、一旦は本山学寮で勤学し、後に江戸の光明寺住持となった。雲室の基本姿勢は「学問に托して遊びある」き、「風流の僻ある書画家の交」を結ぶことであつたといえよう。

② 煌園(一八二七—一八九八)

(C) 煌園著『鉄翁禪師画談』(注12前掲書三頁)

「予ガ家祖先以来内国諸州ヲ回歴シ、西肥産ノ陶器ヲ鬻グヲ以テ業トナス。予ヤ幼ニシテ好画ノ癖アリ。先考嘗テ予ヲ諭シテ曰ク、汝必ラス我が家業ヲ継承シテ懈怠スルコト勿レ、盖シ業ヲ励マンント欲スル者ハ、執着嗜欲ノ念ヲ断タザル可カラズ。汝資性好画ノ癖アリ、今ニシテ其癖ヲ矯正セズンバ、恐クハ我が産業ヲ墜サン。(中略)予深ク其命ヲ服膺シテ、時ニ家業ノ余暇ヲ待チ、墨跡ヲ四方ニ索メテ、(中略)諸大家ヲ訪問シ、到ル所交誼ヲ篤フシテ、互ヒニ属托ヲ受クルコトモ亦少シトセズ。西ニ求ムルノ書画ハ東ニ伝ヘ、東ニ得ル所ノ者ハ西ニ携ヘ、諸家ノ清賞高論ヲ聞テ以テ一楽トナス。」

(D) 同(同一頁)

「禪師、曾テ予ニ示シテ曰ク、我レ毎ニ子ガ性情ヲ察スルニ、頗ブル仏教ヲ信ズル念アル者ノ如シ。我レ窃カニ之ヲ嘉ミス。抑モ仏教ヲ信ズル者ハ慚愧ノ心ナカルベカラズ。若シ夫レ慚愧ノ心ナキ者ハ仏意ニ適ハズ。慚愧トハ吾心身ヲ以テ天ニ愧ヂ、地ニ愧ルノ思アルル云フナリ。書画ノ々道ニ於テ、尤モ此心ヲ欠ク可カラズ。」

(E) (同一四頁)

「又曰ク、古人云ハズヤ、先入主トナルト。画ヲ学ブ者モ亦其初メニ若シ当リ、必ズ善良ナル正師ノ筆跡ヲ学バザル可カラズ。」

筑前芦屋の陶器商人・倉野焯園は、家業を継ぐため、「好画の癖」を矯正するよう父からたしなめられ、余暇に「墨跡を四方に求めて、(中略) 諸大家を訪問し」(C)、長崎の文人の三大家の一人・鉄翁に師事し、後に師の語ったところを『鉄翁画談』にまとめた。焯園は鉄翁から「仏教を信ずる者」の「慚愧の心」は「書画の道」に欠かせないものだとし、その仏教信仰を評価され(D)、絵を学ぶには「必ず善良なる正師の筆跡を学ばざるべからず」という教えをうけた(E)。焯園は、菩提寺の浄土真宗安楽寺(遠賀郡芦屋町)に鉄眠版一切経を経蔵(福岡県指定有形民俗文化財)と共に寄付するほどの篤信家であり、彼の妹は真宗の寺に嫁している。焯園の師・鉄翁の絵画観は端的に文人的な厳格なものであったが、焯園はそのような師の教えに忠実に従い、信仰心に篤い商人としての幅広い活動領域で文人を訪問して交友を結び、「諸家の清賞高論を聞て以て一楽となす」(C)という

ように切磋琢磨して画を学んだ真宗門徒である。

③ 覚円 (?-1838-1858-?)

品照寺の僧・覚円は、三奈木品照寺第一〇世の大音の子で、住職を継がず、生涯を学問に費やした真宗僧である。先に検討を加えた諸伝記類には掲載されていない無名の僧侶であるが、品照寺所蔵資料からその学問の足跡が解明されつつある人物である。⁽²⁶⁾

(G) 画稿「团扇美人図」【図9】⁽²⁷⁾

(H) 水墨綴「夢想図」【図10】⁽²⁸⁾

覚円は、自坊の所在地・三奈木、糸島、京都にいたる広範囲を往来して学び収書活動を行っていたが、秋月藩の御抱え絵師であった斎藤秋圃作品や絵手本の模写【図9】、スケッチ的な墨画【図10】に取り組むなどの絵画活動にも力を注いでいた。品照寺所蔵作品に含まれる画稿(G)や墨画(H)の一部は覚円が手掛けたものである。覚円の画事は、①の雲室の「諸名流の間を遊」ぶ、②の焯園の「諸大家を訪問」し、「善良なる正師の筆跡を学」ぶという価値志向的姿勢とはやや異なり、近隣の絵師の作品や浮世絵や版本を模写するなど大衆的ではあるが、画稿から着色画まで幅広く、風俗画的な主題が多く、遊びの要素が含まれている点が特徴である。品照寺には覚円の他にも、文政二(1819)年に僧龍が狩野永調の天人図を写した画稿【図11】⁽²⁹⁾や覚円以外の作者の手になる墨画などもあり、好画の人々の絵の稽古場的な活動が継続的であったと推定される。

五、おわりに

福岡藩における真宗寺院は、藩主、本願寺門主、狩野派の奥絵師、藩の御抱え絵師、町絵師、地方文人にいたる作者の作品を重層的に受容しうる文化的環境であった。そのような環境で「好画」の僧侶や門徒による鑑賞や制作といった書画活動が営まれたのである。社会の各層の人々が交差する場として、北部九州の真宗寺院が地方文化形成において果たした役割は特にその伝播の面において大きかったといえる。

注

- (注1) 小林忠「江戸時代後期概説」(山根有三監修『日本絵画史図典』福武書店、一九八七年)三六九頁。
- (注2) 柴田一雄「福岡藩」『藩史大事典 第七巻 九州編』雄山閣、一九八八年。以下福岡藩については本書を参考にした。
- (注3) ・筑紫女学園大学刊行の報告書は下記五冊である(報告書Ⅰ～Ⅴと略記)。
筑紫女学園大学・短期大学部『西国浄土真宗文化財調査研究報告書(一)～(三)』二〇〇八、二〇一〇、二〇一二年、筑紫女学園大学人間文化研究所『人間文化研究所モノグラフシリーズ第二号 西国浄土真宗文化財調査研究報告書(四)浄福寺資料』二〇一八年、筑紫女学園大学人間文化研究所『人間文化研究所モノグラフシリーズ第四号 西国浄土真宗文化財調査研究報告書(五)妙徳寺資料』
- 二〇一九年。
・本学以外の刊行になる報告書は下記二冊である(福、品と略記)。
福岡市教育委員会『福岡市内寺社資料調査報告書一 浄土真宗萬行寺・浄土真宗光専寺資料』二〇一五年。
『法喜山品照寺史―品照寺文書を読み解く―のあゆみ』品照寺発行、二〇一八年。
- (注4) 拙稿「北部九州真宗文化財調査報告―近世真宗のうみだした文化的環境―」『筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報』第二三号、二〇一二年。
- (注5) 【表1】は八嶋義之「近世後期福岡藩における寺院統制―浄土真宗西派を素材に―」(『人間文化研究所年報』第二八号、二〇一七年)所収【表1】「福岡藩における浄土真宗西派寺院」を参考に作成した。
- (注6) 朝岡興禎著・太田坦増訂『古画備考』思文閣出版、昭和五八年(明治三七年初版)。
- (注7) 森政太郎『筑前名家人物志』文研出版、昭和五四年(明治四〇年初版)。
- (注8) 井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』永田文昌堂、昭和五四年。
- (注9) 本稿の行論上、対象とする作品の作者については作品に直接記されている落款印章や銘文、関連資料によっており、真偽の判断は下していない。
- (注10) 小林法子『筑前御抱え絵師』(中央公論美術出版、平成一六年)一二一―一七頁 萬行寺所蔵『寺記草稿』に。

(注11) 湯谷祐三「広瀬淡窓より見たる雲華上人の人間関係」『名古屋外国

語大学外国語学部紀要』第五〇号、二〇一六年。

(注12) 前田淑「鉄翁画談」と倉野焯園、勉誠社、一九八二年。

(注13) 墨画貼交図(蟹図・山水図)【図1】1幅 ①蟹図・紙本墨画 扇

面画 掛幅装、上弦51・5cm 下限22・5cm、落款印章「己巳仲

秋日／鐵翁／七十有九」「釋禮明」(白文方印)「鍊翁」(朱文方

印) ②山水図・統本墨画 掛幅装、豎51・4cm 横43・8cm、引

首印「覚非」(朱文長方印)落款印章「鐵翁／時年七十有七」「釋

禮明」(白文方印)「鍊翁」(朱文方印)、卷留墨書「蟹統本山水合

幅第二号／鐵翁老師水墨扇面」、鉄翁祖門、明治2(1869)年、

萬行寺所藏。

(注14) 梅に鳩・東坡風水洞図屏風【図2】六曲一双 紙本墨画淡彩、豎

一五八・五cm 横三五〇・〇cm、印章 兩隻端「語」(朱文重郭長

方印)「辞」(朱文田郭鼎印)、狩野宗眼重信筆、江戸時代、萬行寺

所藏、福岡市指定文化財。

黒田泰三「狩野宗眼重信筆『梅に鳩・東坡風水洞図屏風』」福岡市

教育委員会『福岡市内寺社資料調査報告書一 浄土真宗萬行寺資

料・浄土真宗光専門寺資料』二〇一五年。

(注15) 猫鼠之図【図3】一卷、紙本墨画淡彩、卷子装、豎二六・二cm

横六二六・三cm、上田主親(主治)筆、江戸時代、萬行寺所藏。

萬行寺所藏「寺記草稿」(資料二六六)第十二世正因の条に、本

絵巻の主題となった出来事に関する記述があり、朱筆で「官ノ画

工櫓門上田権六筆」と記入されている。この上田権六を名や活動

時期から上田主親(主治)と見なすことができる。

(注16) 正演上人像【図4】一幅、絹本着色、掛幅装、豎七五・六cm 横

三八・二cm、印章「永調」(朱文方印)「煙霏雲劍」(白文方印)、

上田永調筆、江戸時代、萬行寺所藏。注10小林法子前掲書一四一

頁参照。

(注17) 松鶴図襖絵【図5】八面、紙本着色、縦一七五・三cm 横六七・

六cm、落款印章「華旭齋翻叟」「衣」「笠」(白文連印)「家杜霸王

之乾」(白文長方印)、衣笠守是筆、江戸時代、浄満寺所藏。注10

小林法子前掲書一二七頁参照。

(注18) 河村敬一『亀井南冥小伝』(花乱社、二〇一三年)四七頁。

(注19) 剣順像(浄満寺開山縁起)【図6】一幅、紙本着色、掛幅装、縦五

九・〇cm 横二九・一cm、賛「甘棠」(白文長方印)「穆穆順公種

於古佛遊仕立華徒事軍伐心夙厭世辟人絶物禱神志賀斷食七日天地

応感徳榮祝髮嗟蓮生坊信行髣髴維時文化庚午夏五月穀旦前甘棠館

祭酒六十六翁亀井魯再拜敬題」「亀井／魯」(白文方印)「道載／

□」(白文方印)、亀井南冥賛、文化七(一八一〇)年、浄満寺所

藏。

(注20) 亀井一家集合図【図7】一幅、紙本墨画、掛幅装、縦一一〇・八

cm 横五五・八cm、賛「高堂冬夕舎書畫認文人中有神俗在妙音説

談雜白賁題」、山口白賁(一八三八)、江戸時代、浄満寺所藏。

(注21) 『雲室隨筆』(森銚三・北川博邦編『続日本隨筆集成一』吉川弘文

館、一九七九年)

(注22) 興津香織「西教寺慧海潮音」江戸後期の学問的交流と功績」『印度

学仏教学研究』第五九卷第二号、平成二三年。同『五趣生死輪図』について』『印度学仏教学研究』第六二卷第一号、平成二五年。

(注23) 仙人図【図8】一幅、絹本着色、掛幅装、縦一四八・六cm 横七二・六cm、江戸時代、萬行寺所蔵。

(注24) 拙稿「武丸正助の肖像と伝記―孝子から妙好人へ―」(中川正法・

緒方知美・遠藤一『九州真宗の源流と水脈(筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所叢書一)』法蔵館、二〇一四年)

(注25) 植野健造「高橋源吉《悦雲像》」注3前掲報告書Ⅲ所収。

(注26) 木本拓哉「品照寺覚円の学問の足跡―所蔵典籍の識語を通して―」

『人間文化研究所年報』第二九号、二〇一八年。拙稿「秋圃の受容環境―秋月藩周辺の社寺所蔵作品から」『太宰府市公文書館紀要』第一四号、二〇二〇年。

(注27) 团扇美人図【図9】一枚、紙本墨画淡彩、めくり、縦一〇三・〇

cm 横四〇・二cm、墨書「□月／豊秀画」印章「覚円之印」(白文長方印)「法喜山」(朱文方印)、覚円筆、江戸時代、品照寺所蔵。

(注28) 墨画綴「夢想図」【図10】一四枚一綴、紙本墨画、こより綴、縦二

四・〇―二五・〇cm 横三三・四―三五・六cm、覚円筆、天保一
一(一八四九)、品照寺所蔵。

(注29) 天人図【図11】一枚、紙本着色、めくり、縦一〇三・〇cm 横四

〇・二cm、墨書「文政二卯七月□／上ニカスカニ雨有リ」(下ニ浪アリ永調(調)之筆／僧龍写之)※他に色注あり、僧龍筆、文政二(一八一九)年、品照寺所蔵。

【附記】本稿で取り上げた作品はすべて筑紫女学園大学浄土真宗文化財調査研究プロジェクト(代表…中川正法)による調査対象であり、本稿掲載写真は調査時に撮影したものである。作品調査や図版掲載にあたっては、萬行寺・品照寺・浄満寺のご住職様よりご高配を賜りました。ここに記して謝意を捧げます。

(こばやし ともみ…アジア文化学科 准教授)



【图1】墨画貼交図
（蟹図・山水図）
鉄翁祖門筆



【图2】梅に鳩・東坡風水洞図屏風
狩野宗眼重信筆



【图3】猫鼠之図（部分）
上田主親筆



【图4】正演上人像
上田永調筆



【图6】劔順像（浄満寺開山縁起）
亀井南冥賛



【图7】亀井一家集合図
山口白貴筆



【图5】松鶴図襖絵 衣笠守是筆



【图8】仙人図 作者不詳



【图9】团扇美人図 覚円筆



【图10】墨画綴「夢想図」 覚円筆



【图11】天人図 僧龍筆

【图1】～【图4】【图8】萬行寺所藏
 【图5】～【图7】浄満寺所藏
 【图9】～【图11】品照寺所藏

北部九州の近世文化形成における真宗寺院の役割
（福岡藩真宗寺院所蔵の書画から）

小林 知美

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第三十一号 二〇二〇年